
ワルモノ達の国

1 1 0 4

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワルモノ達の国

【Nコード】

N1661U

【作者名】

1104

【あらすじ】

世界中から悪人、はみ出し者、国に居られなくなった者たちが行き着く国。

その国で巻き起こる事件やら何やらを書いていこうと思います。

邪道だけど王道の物語が始まるよ。

プロローグ（前書き）

勢いで書き始めた作品です

軽い気持ちで読んでください

プロローグ

どうも！

勇者国レシフォアの勇者鳴神涼、ここではリヨウ・ナルカミになるけどね。この前、魔王領トリメンの魔王クレウを倒してさ。昨日、凱旋パーティーが開催されたんだ

ああ、そうそう。この世界はミルディニルって呼ばれてて、この世界の覇権を、勇者教を国境にしている勇者国が集った勇者同盟と、魔王が治める魔王領、その魔王領が集った魔王連合の2大勢力がこの世界の覇権を争ってるんだ。ああ、勇者教っていうのは勇者神ジンを信仰してる宗教なんだ。勇者神ジンっていうのは歴史上最悪の魔王コレウキサレウスを倒した英雄らしいんだ。で、僕は異世界“地球”から召喚された勇者なんだ。この『勇者召喚』ってのは、勇者同盟に所属してる勇者国でも一部の国にしか伝わってないんだって。それで、称号^{クラス}『勇者』っていうのは異世界から召喚された人は必ずと言っていいほど成れるんだけど、この世界の人ではあんましなれないんだって。だから、あんまり僕以外の勇者を見ないんだ。そうそう、称号っていうのはこの世界の人なら皆が持っているモノなんだ。この称号はたくさんあって、RPGに登場するような『戦士』、『魔法使い』、『僧侶』から『料理人』までたくさんあるんだ。この称号一つ一つには特殊能力があって、『勇者』の特殊能力は“光魔法”って言って、『魔王』の特殊能力“闇魔法”の弱点なんだ。この“光魔法”と“闇魔法”の関係を簡単に言くと、光魔法>闇魔法>他の魔法なんだ。でも、“古代魔法”にはこの常識が通用しないらしいんだよね。僕は見たこと無いからわかんないんだけどね

それで、一昨日帰ってきて昨日凱旋パーティーがあつたばかりなんだけど、今国王様に呼ばれて会いに行くとこなんだ

「よく来てくれた、リヨウよ」

「いえ、呼ばれたならば来ないわけにはいきませんゆえ」

「主を呼んだ理由はな…」「おゝい、国王さんよなんかようかい？」

おお、来てくれたかジークよ」

「そりゃ、国王さんは払いがいいし、ついでに、こいつと一緒にいると退屈しねえからな」

こいつはジーク、一緒に魔王を倒した仲間なんだ。何でも、妹の病気を治すために必要な薬の材料がすごく高いからそのお金をためるために傭兵をしていたんだって。その話を国王様が聞いて僕の魔王討伐に雇ったんだって。称号は『戦士』だよ

「ジーク、国王様にそのような口の利き方は何だ！？」

「よい、リーゼよ」

「そうですか、国王様がおっしゃるならば」

この人はリーゼ、この人も一緒に魔王を倒した仲間なんだ。国王様の親衛隊の一人でもとても強いんだ。そうそう、称号は『剣士』で『戦士』の上位クラスなんだ

言い忘れてたけど称号っていうのは、ある一定の厳しい条件をクリアすることで上位クラスに昇格したり、別系統の称号に変動したりするんだ。例えば、『戦士』から『剣士』。『魔法使い』から『魔法剣士』とかね

「それで、お主達を呼んだ理由なのじゃが、悪いが一つ任務を受けてはくれぬか？わしとしては、お主達には魔王討伐の疲れを癒してもらいたいところなんじゃがな、同盟の議会からの通達での。断りきれん買ったのじゃ、すまぬな」

「いえ、国王様の頼みとあらばどのようなことでもいたす所存であります」

「金さえ払ってくればなんでもいいぜ」

「お主達、魔王討伐の英雄に頼みたい任務とはな…ある国へこの手紙を運んでもらいたいのじゃ」

「国へ手紙を運ぶ？そんなん、郵便屋か便利屋に依頼すりゃあいい

「じゃねえか」

「その国のある場所がちとやっかいでの。御主達のように魔王を倒した者なら簡単に通れるのじゃが、郵便屋や便利屋では到底辿り着けなくての」

「そうことかよ。で、俺たちはどの国にその手紙を運びゃあいんだ？」

「それはの…ところでリヨウよお主は“中立国”のことは知ってるな？」

「もちろんです。力こそが全ての“武国”、この世界の流通の中心“商国”、それと…鬼と人間が共存する国“和国”の3国です」

「そうじゃ。その3国は我ら勇者同盟と魔王連合との両方に和親条約を結んでおる。しかし、この世界にはもう一つ“中立国”があつての。わしはその国に手紙を運んでもらいたいのじゃ」

「その国は…何というのですか？」

「それはの…そこからは私が説明する」遅かったではないか、ヴェニリスそれにウィッチ・オリエンスよ」

「私じゃない、この人が遅かったの」

「ええ！私ですか！まだ時間があるってゆっくり歩いてたのウィッチさんじゃないですか！？」

この二人も魔王と一緒に倒した仲間なんだ

背が小さくていかにも魔女って服装をしてるがウィッチ・オリエンス。この世界では「オリエンス」みたいな名字は人間の貴族にしかないんだ。とつても、強い魔法使いで称号も『魔法使い』なんだもう一人がヴェニリス。僕たちは呼びにくいからヴェニーって呼んでるよ。称号は『僧侶』で回復とか解呪のエキスパートらしいよあんまり、そんなトコ見たこと無いけど。それと、いつもは勇者教の教会に勤めてるシスターなんだって。これも、あんまり見たこと無いんだ。だいたい、ウィッチと一緒に図書館とかにいるから

「では、お主に説明をまかせようかの」

「うん。じゃあ、リヨウ。これから私たちが向かう国は『中立国ダ

ミレスク』。この世界中の悪人、はみ出し者、国に居られなくなつた者たちが行き着く国。通称

“ぞうこく 賊国”

この前、勇者国同盟の同盟国の一つ“トステリイン”が魔王領“ベバル”に負けたのは覚えてる？」

「うん。流石に旅の途中だったけど、そのことはすごいニュースだったよね」

「あれは違うの。実際は“賊国”が原因で負けたの」

「え！？それはどういうこと！？」

「それは、これを見てもらえば分かる」

「これ？ああ、録画用魔水晶か」

「これは、トステリインが負ける前に勇者同盟本部と魔王連合本部に送られてきたもの」

「なにが映ってたの？」

「観れば分かる」

「じゃあ、貸して観てみるから」

なにが映ってるんだろうな

『くそつ。何で俺がこんな国に使者に来なきゃならないんだ』

身なりのよい人間の男がブツブツとそのようなことを言いながら歩いている

『くそ、くそ、くそ……』

その男は歩いている魔族とぶつかる

『いつてえだろが！』

『どこに目えつけてんだ！』

『お前は！ベバルの！』

『貴様はトステリインの！』

どうやら、この二人は現在戦争の真つ最中である二国の使者であるようだ

『ちつ、お前もこの国にきてやがったのか』

『それはこつちのセリフだ。貴様もこんなところに来ているとはな』
人間の男は剣を鞘から出し

魔族の男は杖を構える

杖の先から火の玉が人間の男に向かう。火の玉は人間の頭ほどの大きさに膨らみながら人間の男に向かう

しかし、人間の男は剣でその火の玉を真つ二つに切った

二つに割れた火の玉はそのまま消え…なかった

片方は地面にぶつかり

もう片方は通行人の老人に向かう

しかし、その老人が手をかざすと二つに分けられた火の玉の片方は消えた

『お前さんらは他国でいさかいを起こすなと教わらなかったのかの？まあ…どうでもよいがの。おい、今の撮れておったか？』

『『もちろん』』』

『うむ。ご苦労であった。で、これを見ている者共への伝言じゃ。

たつた今、この二人の男はこの国で戦闘行為を行った…とは言つても、この国ではあの程度は日常茶飯事じゃがな。じゃが、この我に“攻撃が向かった”と、いうわけで我々“賊国”はこの二国に攻撃を行うぞ。ああ、我々の邪魔をした場合は邪魔をした国にも攻撃を行うからな。そのつもりで妨害をして来るがよい』

「この3日後にトステリインは王家の宝物庫にあった財宝を全て奪われ、中心街の周りの村の農作物を全て奪われた。たぶん、ベバルも同じことになったと思う」

「えええ！」

「おいおい、それはしやれになんねえよ」

「これで分かったであろう？この国には生半可な者では無事に帰って来れないのだ。頼む、お主らにしか頼めぬのだ」

「わかりました国王様。僕が僕たちが必ずその手紙を届けます」

「そうか、行ってくれるか。頼んだぞ」

「はい！」

「それで、“賊国”はどこにあるの、ウィッチ？」

「国境線を跨いで存在するミルント山脈の麓、“血の森”を越えその後の“天の草原を”越えたところに“賊国”の中心街は存在する。一応、“血の森”から“賊国”の領地ではある」

「けっこう、広いんだね」

そう、そのとき僕の考えは甘かったまさか、馬が使えないなんて…

プロローグ（後書き）

どうでしたか？

今回は勇者リヨウの主観でしたが、次からは3人称になると思います

誤字・脱字等ありましたらご報告していただけるとうれしいです

追伸：次話の予定は未定です

勇者国レシフォーの勇者訪問 その一（前書き）

できたので投稿します

期末近いのに何してんだろう？

勇者国レシフォアの勇者訪問 その一

ミルントン山脈——勇者国同盟と魔王連合の勢力の真ん中、そして世界ミルディニルの海岸線沿いに存在する山々の総称。そして、その麓に広がる平野“天の草原”その草原を囲むように存在する森“血の森”。そこでは、この世界に存在する魔獣。さらには、新種の魔獣が闊歩し、独自の生態系を築いている

その森を歩く青年たちが居た

一人は白く輝く剣を持ち、防具は深い蒼に染まった鎧を着けている勇者リヨウ

一人は鉄の剣にレザーの防具という動きやすい格好をしている傭兵ジーク

一人は最初の一人には及ばないものの銀色の美しい剣を持ち、防具というより服を着た兵士リーゼ

一人はとんがり帽子に杖、そしてマントといういかにも魔法使いという格好をした魔法使いウィッチ

一人は教会の修道女シスターが着ている修道服であった物…というのも、改造が施されており原型が分からないためである。そのような物を着ているシスターヴェニルス

「うん、やっぱり広いんだねこの森」

額に汗がにじみながらも先頭を歩く勇者リヨウ

「いや、丸一日歩いてまだ出口が見えねえのは『けっこつ』なんてモンじゃねえだろ」

「地図が正しければもうそろそろこの森を抜ける…はず」

「そのせりふさつきも聞きましたよ」

「それにしても、早くこの森を出たいものだ。ここの魔獣のレベルは他のダンジョンや森と比べると一回りは上だからな」

「ついでにアイテムがそろそろ無くなりそうだよ」
「そのぶん、経験値がかなり入ってるけどな」

経験値——戦ったモノを倒したときに貰えるモノ。自分の魂に蓄積していき、その蓄積量が一定以上に達すると身体能力が上がったり、特殊技能が手に入る。簡単に言えばレベルアップのことだ。このシステムはこの世界に存在するモノならどのようなモノにでも適用される

「そうだね、けっこう強くなった気がするよ」
「そうか、次に手合わせするときに楽しみだ」
「うへへ、よくこんなトコでそんな事言えるぜ」
「あつ、あれ出口」
「やった〜！」

ウィッチが指差した方向に走り出すヴェニー

「よつしやー、やっと出れたー！」

“天の草原”に出れた勇者リョウ一行

よほど“血の森”踏破が疲れたのであろう、彼らは少しペースを落としながら歩いていた

「なあ、ウィッチさんよ。後どのぐらいで“賊国”には着くんだった？」

「“血の森”を抜けたからあと少し…ほら見えた」

「お、でけえ城だな」

「ほんとですね。あ、あそこが門でしょうか？」

「そうみたいだね、行ってみようか」

「そうだな。門番もいるだろうから、あの国について聞いてみるのもいいだろう」

勇者一行は門に近づく

「門番って、あいつのことか？」

「え？あの親子？」

勇者リヨウの目に映っていたのは彼がもと居た世界“地球”ではポピュラーな光景だった

父が球を投げ、子が球を受け、そして子が球を投げ、父が球を受ける。そしてその一連の光景を母が微笑んで見ている

そう、これだけを見ると仲のよい親子だ。しかし、父と子がしているキャッチボールのようなモノは彼の知っているキャッチボールとは違うものだった

子が球を投げる、その球は光を放ち目でギリギリ追える程度の速さで父の元へ向かう。父はその球を片手で受け止め、そっくりそのままのスピードで子へ返す。いや、父が投げる方の球は子が投げるよりも若干早い

「ほーれ、まだ早くなるだろう？もつとスピードを上げて」

「えー、めんどくさい。そんなことよりさー、ニルクルのとこ行ってもいい？今日は湖で遊ぶって約束してんだからさ」

「しょうがないな。じゃあ、後ちよつとやってからならいいぞ」

「やった」

そう言つて、先ほどより球のスピードを上げる二人

「ねえウィッチ、あれってさ…魔力操作の初歩訓練だよな？」

「ええ。やっていることは初歩訓練ね」

「スピードが全く違うよね、僕がやったときと」

「基本はあんなスピードでやる事ではないからね」

若干、引いた様子のする二人

「なあ、リヨウ。あの子供とおっさんの魔力球が勇者と一緒に色なんだがよ」

「しかも、あの男の子黒色の羊の巻き角生えていますよね。あの女の人も」

「ならば、あの二人は『魔王』の血族ということになるが…“光魔

「ねー、もう行ってもいい？」

「いいよ、行つてきな」

「うん！行つてくるねー！」

そう言つて姿を消す先程ネロスと呼ばれた子供

「あらあら、あれほど転移魔法を使うなといつてたのに。ネロスつたら」

プンプンという効果音が似合う様子で怒る女性

「で、あなた方はどちらですか？」

「えっと、僕は勇者国レシフォーの勇者リョウ・ナルカミです」

「私は勇者国レシフォーの王宮魔術師ウィッチ・オリエンス」

「勇者教所属シスターのヴェニルスです」

「勇者国レシフォー国王近衛部隊所属リーゼ」

「んで、俺が傭兵のジークだ」

「ああ、この前どつかの魔王領の魔王を倒した勇者一行だね。話は聞いてるよ。それで、この国に何の用かな？」

「勇者国同盟からの手紙をお届けに」

「そうかい、ここまで来るのは大変だっただろう？“血の森”はウチの博士が研究で創った魔獣が放し飼いになつてるからね。今度来るときは転移魔法を使うといいよ、その魔術師さんは使えるだろう？」

「なんで、分かつたの？」

門番の男に杖を向けるウィッチ

「ウィッチ！だめじゃないか、杖を向けたら！」

「ハハハ、気にしないよ。それに、その程度じゃ僕には脅しにもならないからね」

「じゃあ、試してみる？」

けんか腰になるウィッチ

「ああ、自己紹介が遅れたね…俺は“賊国”中心街の門番ナミレス。元勇者さ」

勇者国レシフォーの勇者訪問 その一（後書き）

どうでしたか？

この話から三人称の視点で書きます

追伸：一話は3、000文字前後でいききたいと思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1661u/>

ワルモノ達の国

2011年10月7日23時38分発行